

フクシマ

—— フランス雑誌メディアにおける日本社会文化表象の現状 ——

ジャン＝ポール・オノレ

(翻訳 友谷知己¹⁾)

はじめに

今回の私の発表の目的は、現在フランス・メディアで流布している日本に関する言論について、皆さんにお話することです。私は特に、日本の社会文化に関して使われるステレオタイプのことを、最近発生した出来事をもとに、話してみようと思います。

まず、所謂ステレオタイプとは何かということを確認しておきましょう。ステレオタイプとは、人文科学においては、その虚偽性によってではなく、その頻度によって定義されます。言論において、ある単語や、ある表現や、あるいはある主題が高い頻度で使用されると、それがステレオタイプです。またステレオタイプは様々なレベルでの働きを持っています。

実際、ステレオタイプとは、言葉の在り方（現実との関係）の問題と

1) [訳者注] ここに訳出したのは、関西大学フランス語フランス文学会主催によるジャン＝ポール・オノレ氏講演会（2014年7月14日於関西大学）、「フクシマ——フランス・メディアにおける日本社会文化表象の現状：雑誌記事の場合——」の原稿全文である（仏語原題は *Fukushima. État des représentations de la socioculture japonaise dans le discours d'information médiatique : le cas de la presse magazine en France*）。講演会当日、オノレ氏は時間の関係でテキストや注部分を大幅にカットされたが、今回はそれも訳し、また『仏語仏文学』掲載を期にオノレ氏が入られた若干の加筆訂正も反映している。

いうよりも、言葉の働きかけの問題なのです（例えば、もっともらしい言説を構築したり、エキゾチズムを読者に提供したり、何かを断罪したり、といった働きかけです）。

さて、いまから三年前、日本には一連の大惨事が発生しました。そしてそれに関してフランスのメディアは多くの言葉を費やしました。2011年3月11日に東北を襲った三つの悲劇のことです。即ち、大地震と、それと同程度の破壊力を持った津波と、深刻極まりない原発事故です。

フランス・メディアはこの悲劇的にして錯綜した事態を、非常に大きく取り上げました。私の今回の話は、この東北大震災に際して日本を描いたフランス言論の姿の、ディスコース分析です。研究のコーパスとして私は、フランスの雑誌を用いました²⁾。

本題に入る前に、極く簡単にこれまでの私の研究成果の二つに触れておきます。どれも今日の話の基盤となっています。

- 次のような論文を發表しました。「日本最良から日本嫌いへ。標準的出版メディアにおける豹変するステレオタイプについて」。ここで私は、1980年代末から1990年代初頭のフランス・メディアにおける、日本にまつわるステレオタイプのリストアップとその解釈を試みました³⁾。

2) 震災後間もなく出された、以下のような雑誌の特集記事を調査した。『フィガロ・マガジン』2011年3月19日。『エクスプレス』2011年3月16日、23日、4月13日。『ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』2011年3月17日、24日、31日。『ル・ポワン』2011年3月17日、24日。『マリアンヌ』2011年3月19日、4月1日。『パリ・マッチ』2011年3月17日、24日、31日、4月1日。『テレラマ』2011年3月26日。『VSD』2011年3月17日、24日、31日。順に以下のような略号を用いる。*FM, Exp, NO, Pt, Mr, PM, Tr, VSD*. 略号の後には月日を示し、特に断りのない限り、刊行年は2011年である。

3) ジャン＝ポール・オノレ「日本最良から日本嫌いへ。標準的出版メディアにおける豹変するステレオタイプについて」、『政治の言葉・言語』所収、国立政治学協会出版部、1994年12月、9-55頁。

この80年代末から90年代初頭という期間は、時代の転回点でした。一方には日本をこよなく愛する新たなジャポニズムとでも言うべきものがあり、他方には、経済面での修正主義的な主張のインパクトがメディアに形成した悪意に満ちた日本像があったのです。この修正主義的な主張というのは、日本は文化的な他者である、異質なものであると言い立て、日本を自由貿易の枠組みから閉め出してしまおうというものでした⁴⁾。当時はこうした修正主義的言説がフランスの以下のような場に展開されていました。産業界では、プジョー社長ジャック・カルヴェの発言。政治の舞台では、当時のエディット・クレソン首相の有名な比喩。そして文学界では、アメリー・ノトンプの1999年の小説『畏れ慄いて』の中、といった具合です。当時のメディア・出版業界に存在していたこうした傾向に基づく、典型的な図版の例を、補足資料として末尾に掲載しておきます。

つまり私は当時、最も目につくステレオタイプ、断定的な物言い、論証型の言説、あるいは何らかのテーマを取り上げるもの、を拾い上げて、それらを8つのカテゴリーに分類しました。そして、これらのステレオタイプは二分化され得るということを明らかにしました。即ち、ステレオタイプは、発話者の狙いに応じて、ある時は否定的にまたある時は肯定的に姿を変えるものだ、ということです。

例えば、日本の[・][・][・]パワーに関するステレオタイプの場合、経済力として

4) ドミニク・ノラ（フランス人ジャーナリスト、左派系の経済・金融問題のスペシャリストで、『リベラシオン』や『ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』に多く寄稿）によれば、修正主義という言葉が現れたのは1980年代末のアメリカ金融業界の経営者団体だったという。日本への新たな経済対策を模索しようというこの修正主義は、西欧マーケットの手厚い保護を推進しようとする動きで、日本という国の文化的政治的異質性に鑑みて、欧米と日本との真のパートナー関係は不可能だと考えていた。日本との自由貿易などは必ずや不均衡にならざるを得ず、西欧にとっての危機であるというのであった。参照、ドミニク・ノラ『サムライの抱擁』パリ、カルマン＝レヴィ社、1991年、第10章。

捉えると日本のパワーとは肯定的な意味となりますが、日本のパワーはまた「暴力的」とも捉えられ、それは日本という国と日本文化の、否定的な印しとなるのです。その他にも、日本の秩序に関するステレオタイプがあります（肯定的には社会の調和、否定的には順応主義、です）。あるいはまた、日本という国は謎だとするステレオタイプもあります⁵⁾。

この調査から得られた一つの結論は、次のようなものでした。即ち、私が出版ジャーナリズムのウルクタと呼ぶもの（つまり標準的な出版メディア）は、もっともらしい言論のシステムを操っているということです。そしてこのもっともらしさの言論システムとは、比較的単純でありながら実に強力なものなのです。

このシステムは、言葉のトポス・紋切り型のようにして、いかにも論理的には正しいものであるかの如く見えつつ、時に、全く矛盾な日本の描写を可能とします。そしてその矛盾は、読者の目に留まると、観察対象それ自体、つまり日本自体に乗り移るのです。かくして、日本という社会文化に張り付いて離れることのないステレオタイプ、パラドックスの国＝日本というステレオタイプが生じた訳です。

先般東北で起きた出来事は、こうしたこれまでのステレオタイプ化された表象がどのようなものとなっているかを考える契機となっています。ステレオタイプは、現在のジャーナリズムの言語・映像においてなお、その痕跡を留めているのでしょうか。

- これを判断するにあたって、私は比較の対象をひとつ持っています。1995年の阪神淡路大震災に関するフランス・メディアの記事です。私のこの時、1989年カリフォルニア州北部サン・フランシスコ郊外で発生した（ロマ・プリータ）地震の記事と阪神淡路大震災の記事とを比

5) その他のステレオタイプとして、以下のようなものが挙げられる。厳格さ（名誉、自己疎外）、現実主義（柔軟さ、二枚舌）、洗練（美意識、軟弱）、過去（伝統、懐古趣味）、近代性（革新、伝統の放棄）。

較検討しております⁶⁾。

結論としては、アメリカの地震を扱った記事と日本のそれを扱った記事との間には、明確な対立がある、ということが分かりました。

サン・フランシスコの地震に関するフランス記事は、ありありと、カリフォルニア州民とフランス人との親密さ、両者の類似性、精神的連帯感を示していました。カリフォルニア州民との仲間意識の故に、テキスト内部には頻繁に、フランス人が感情を共有しているのだという記述が見えたのです。

その逆に、阪神淡路大震災に関するフランス記事がありありと示していたのは、日本社会の異質性であり、日本的行動と価値の他者性であり、フランスの精神風土と日本との遠い距離だったのです。

そこに見えたのは、天罰というシナリオでした。大地震は、日本の罰だったという訳です。経済力・財政力を過信していた日本は、ヒュブリス（倨傲）に捉えられ、神の摂理のようなもの、つまり自然によって罰を受けたというのです。そして自然は、以前の正統な秩序を復活させたのだと、いうのです。これが、フランス・メディアが大量に流した、自民族中心主義的言論でした。

ところが、今回私がお話しようとしているのは、東北の惨事に関してフランス・メディアで支配的だった論調は、日本への仲間意識と共感だったということなのです。私はまた、そうした事態が生じた原因についても後程分析してみたいと思います。

先ず最初に、最も顕著で最も意味深い例を挙げることから始めたいと思います。

6) ジャン＝ポール・オノレ「偏見から神話へ。阪神淡路大震災の教訓」、『自由な言葉』モーリス・トゥルニエ退官記念論集、フォントゥネー／サン・クルー、高等師範学校出版部、1998年、第2巻、377-388頁。

I. ステレオタイプの存在

A. 自然の猛威の国

先程少し触れた1994年の論文で私は、フランス・メディアに頻繁に見られるものを一つ指摘しました。即ち、日本は様々な形の暴力というものに晒された国である、という表現です。中でも、自然の猛威についての言及がしばしば見られます。

2011年3月の日本の状況に、こうした自然の猛威に関する暴力のステレオタイプが使われたらうことは、容易に想像がつくと思います。

例として以下のようなものがあります。多くの雑誌記事が、ポール・クロードルのエッセー『朝日の中の黒い鳥』（ガリマール出版社、1929年）を引用しました。殊にクロードルによる、当時の東京や横浜の廃墟の描写です。それによって、日本における悲劇の連鎖というものが見出されるのです。またそれによって、運命というテーマが導入されます。超越的で神秘的な何らかの力による日本の迫害、というテーマです。日本にとって、「地震と津波は、逃れられぬ運命なのである」と、『ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』は記しています。

またそこから、日本人の行動様式の原因をその文化に求めようとする、所謂文化主義的解釈が生まれます。この種の解釈では、被災者や広くは日本人全般の被った苦しみが、文脈によって相対化され日本人にとっては日常的なものだと強調されます。

- (1)日本全国が神々しいまでの冷静さを示している。ここ数日の災害の、信じ難いまでの連鎖にも拘らず、である。[中略]大地が揺れ、水平線の彼方から波が押し寄せ街を木々端微塵にし、原発事故が降って沸く。日本人はそんなことに驚きはしないのである (NO, 3月17日)。

この引用にあるように、自然の暴威には、もう一つの暴力が加わっています。メディアの描き出す日本像に濃い影を落としている、原子力の暴力です。フランスの雑誌記事は決まって福島と、広島・長崎を結びつ

けて描いたのです。

かくして東北の惨事の背景には、日本の戦後のイメージが漂うことになります。まるで日本は、いまだ戦後から抜け出せていない、いまだ2発の原爆の傷を負っている、といった論調なのです。つまりここにもやはり、日本の背負う悲劇的運命という主題がある訳です。複数のフランスの記事が、こうした超越性の存在を強く暗示する言葉を含んで書かれています。それは悲壯感をいたずらに煽るものであって、つまりは、読者の欲求に迎合しようとしているのです。

(2)今や、広島の名が、人々の口の端に上ろうとしている。そう、広島だ。日本にとって忘れられない原爆投下の、屈辱的敗戦の象徴、広島だ。呪われた土地、日本は、まるで広島と福島という二つの呪いに引き裂かれたかのようなのである (Mr, 3月19日)。

こうした超越性の問題に関しては、三面記事や災害を語るメディアのディスコース分析を行ったパトリック・シャロドーを想起することが出来るでしょう。

かつてシャロドーは、メディアの言葉というのは単にかくかくしかじかの情報を指し示すだけのものではない、ということを明らかにしました。シャロドーを引用します。メディアの言葉は、「非合理の世界への扉なのだ。読者はある事件を、メディアの創作する因果関係によって理解するように、つまり超自然の虚構の物語として理解するように誘われているのである⁷⁾」。

こうしたオカルト的な要素に加えて、フランスの雑誌記事には福島と第二次世界大戦とを繋ごうとする傾向が見られました。

例えば、「キノコ雲の幻」等という表現が見られますし、また、福島で放射線を浴びたであろう人々をわざわざ日本語をつかって「ヒバクシャ」

7) 『言語と言説 記号言語学の原理 (理論と実践)』、パリ、アシェット社、117頁。

と呼び、さらには昭和天皇が日本の無条件降伏をラジオで知らせた「耐え難きを耐え」という表現が使われたのです。

- (3)1945年8月15日の昭和天皇の言葉を思い起こそう。連合国に降服したその日、天皇は「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び」と言った。2011年3月11日、大地は「怒（いか）った」。日本人はもう一度、耐え難きを耐えねばならぬである（Pt, 3月17日⁸⁾）。

つまり、過去の悲惨事とは、現在の悲劇を理解するための貴重な参考資料なのですが、こうした過去への言及によって、現実の神話化、現実の運命的な装いがなされてしまうのです。結局のところこうした言論は、日本の他者性を大袈裟に強調するばかりなのです。

とはいえ、日本の悲惨のそれまでの描かれ方とは異なり、2011年当時の、固定化され一面的で異国趣味に満ち、情緒過多のこうした言葉は、日本の有罪性を匂わせるようなものではありません。逆に、

- 阪神淡路大震災関連の記事とは全く異なり、運命には、天罰の様相は全くありません。
- 価値論的に見て、記事の言葉はみな、一致団結した立派な振舞いを見せた被災者たちを称賛しているのです。

B. 立派な日本人。先入観による表象？

福島原発で発生した爆発事故による放射能汚染に関して、『フィガロ・マガジン』は次のように書きました。「日本人は見えない敵と立派に立ち向かっている」。『テレマ』はこう強調しました。「日本国民のあれほどの立派さに世界中の人々が目を瞠った」。『パリ・マッチ』も同様に「日

8) 『ル・ポワン』のこの記事は、社会学者ジャン＝フランソワ・サブレを引用している。

本人の立派さに世界は感心している」と書きました⁹⁾。

今回私が調査に使ったテキスト群に、語彙統計を取ってみれば、恐らく「立派さ」という言葉が、頻出単語の上位に来ると思います。いえ寧ろ、最頻出の単語かも知れません。

次に「勇気」という言葉も頻繁に現れています。ある雑誌はこう書きました。もし震災時に、「震度計が勇気を計測したなら、日本人の勇気は計測器の頂点を示したろう¹⁰⁾」。また別の雑誌もこの点について、次のようなエピソードと談話を伝えています。

- (4)「日本人というのは、最もパニックに陥らない国民です」、と東京のテンブル大学教授ロバール・デュジャリックは述べている。地震発生時に新幹線に16時間閉じ込められたデュジャリック氏によれば、乗客の誰一人としてぶつぶつ文句を言わなかったという。「全員が静かに黙っていました。そして16時間後の車内は、出発したときと全く同じ清潔さを保っていました。フランスだったらどうだと思われませんか！」(Pt, 3月17日)。

ただこれらの言葉は、やや理想化された日本像を描いています。引用の最後の部分の、フランスとの比較が顕著に示していますが、こうした言説は単純な情報伝達ではありません。ステレオタイプによってイデオロギー的なニュアンス（ある種の描写では思想的前提＝イデオロジーム¹¹⁾）が伝達されているのです。

9) FM, 3月19日。Tr, 3月26日。PM, 3月17日。

10) FM, 3月19日。

11) 参照、マルク・アンジュノ『誹謗の言葉』ペイヨ社、1982年、169頁以下。思想的前提（イデオロジーム）とは、言外の、規定的で義務的な命題である。それは社会や集団のある価値を示す。この文脈の思想的前提とは、落ち着いた規律ある集団行動は、倫理的に言って、個人主義的で乱れた行動よりも好ましい、ということである。そして後者はフランスに広まり過ぎている、と前提されている。

現実には、想像を絶する状況ですから、こうした言説よりももっと込み入っていて、もっと様々な姿を含んでいます。時には、ごくたまにですが、雑誌記事のテキストが——また画像もです。名取市の廃墟の中に座り込んで泣いている若い女性の写真¹²⁾が一例です——、恐れや、苦しみや、怒りや、といった日本人の感情的身体的表現を伝えてもいます。

それで私は、次のように考えてみました。日本国民の勇気や、立派さや、「神々しいまでの」と呼ばれる冷静さへの言及が、雑誌記事にここまで広範囲に現れたのは、単に現地でそれらが観察されたからというだけではなく、フランス人のうちには実はそういう思い込みが既にある、その為に物の見方も誘導されている、ということです。

別の言い方をしますと、日本人の立派さという概念は、実はより広い概念に含まれていると思います。私はそれを日本人についての、名譽のステレオタイプと呼びたいと思います。このステレオタイプによると、日本人は、(特に武士道の)文化的伝統から、非常に厳しい倫理的規範を持っており、それがために恐れに堪え、苦しみも露わにせぬよう運命付けられている、ということになります¹³⁾。

標準的出版メディアにおけるこの名譽のステレオタイプの根深さは、

12) 参照、VSD, 3月17日の表紙。

13) 時にそれは面子の紋切り型としても表現される(ただ今回の調査では見られなかった)。これはまた日本人の「サムライ化」という、古くから見られる主題でもある。1990年4月7日、在日フランス大使は『フィガロ・マガジン』に次のように述懐している。「厳のように堅固にして、桜のように繊細な人々、これこそが私の愛した日本人である」。また東北の被災者たちの勇気について、ジャン＝フランソワ・サブレは『ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』の誌面で、日本のことわざ「泣き面に蜂」を紹介している。こうした日本人の捉え方を史的に辿っていくなら、そこには、帝国主義の時代に広く共有されていたステレオタイプ、アジア人は不幸に耐性がある、があると考えられるであろう。

〔訳者注〕サブレは「泣き面に蜂」——フランス語で « Les guêpes piquent les visages qui pleurent » と訳される——を、「悲嘆にくれる者にはさらなる不幸が訪れる、よって何でもない顔をしていた方が良い」、という意味に誤解している。

東北大震災を伝える記事に、日本人の立派さというテーマが度々顔を出したということと繋がっているのです。

ところでこうした一面的な日本人の描き方は、全くの虚偽では恐らくありませんが、震災現場の日本人は当然それ以外の行動も示した筈ですから、あまりに偏ったものと言わざるを得ません。そしてここにはかなり問題があると、複数の識者からの指摘がありました。

実際、日本人の立派さや毅然とした態度を過度に拡大することとは、被災現場の日本人の行動をそれ以外のやり方で解釈するのをやめてしまうことであり、現実の単純化に外なりません。つまり、人々の悲痛な苦しみという側面が、全く捨棄されてしまうのです。そういった訳で、これから引用しますように、報道業界には属さない複数の識者から、極論は避けるべきだとの意見が出されました。

• 大学人の場合です。セシル酒井は次のように発言しています。

(5)あちこちで、日本人の冷静さ、克己心、落ち着き、が褒めそやされている。しかし我々は恐らく、日本人の虚脱感を忘れている。「泣いたり叫んだりもしていると思いますよ、でも報道にはそんなものが現れないのです」(NO, 3月17日¹⁴⁾)

• 日本を研究対象としている社会学者の場合です。ジャン＝フランソワ・サブレは、東北地方の人々が見せたあれほどの「立派さ」には、きつと日本固有の文化的な素地があるのではないかと、『ル・フィガロ・マガジン』に問われた際に、きっぱりとこう答えています。日本人にストア派のような克己心を見るべきではない、英雄等とは違う、より人間的な姿を見るべきである、と。

14) 日本のメディアも、我々と同じく、彼等固有の問題を抱えているのである。

(6)簡単に、そんな克己主義的な文化を日本に当て嵌めることは不可能です。「こっそり軍国主義になろうとする」国日本に、「ストア学派の禁欲主義」を見るのは大きな間違いです。日本人は、親類縁者の誰かが死ねば、泣いて悲しみます。本当ですよ (FM, 3月19日)。

これらの指摘は、バランスのとれた極めて妥当な判断だと思えます。今見た引用は、雑誌メディアが乱発した勇氣ある日本人というイメージに真っ向から反対するのではなく、ステレオタイプの説明力の限界を示しつつ、現実により正確に迫ろうとする態度なのです。

日本人の立派さのテーマについて最後にもう少し述べたいと思えます。1980-1990年代のフランス・メディアにしばしば見られた、サムライやカミカゼといった言葉は、2011年ではどうなっていたか、という点です。

サムライ・カミカゼという言葉は、2011年にも使われていました。ただ用例はかなり少ないです。例えば、日本政府要人が大地震の際にも避難所に駆け込まなかったことに因んで、彼等をサムライ政治家と呼んでいる記事があります¹⁵⁾。しかし、サムライ・カミカゼという言葉は稀にしか登場していません。恐らくは、サムライというもののイメージの両義性にその理由はあるのだと思えます。経済政策の文脈ではかつてサムライとは、日本の好戦的で威嚇的なイメージを補強するのに役立ったのですが、2011年には、そうしたニュアンスはほぼ掻き消えています。

一方カミカゼという言葉は、サムライよりは高い頻度で用いられました。そしてこの言葉は、サムライ以上にピンポイントに、ある人々を指しています。即ち、原発の事故現場に赴き被害を最小限に留めるべく献身的に作業を行った技術者たちが、カミカゼと呼ばれているのです。

かくしてある雑誌は「180人の原発カミカゼ」というタイトルの記事を

15) NO, 3月17日。別の例では、模範的な行動をとり続けたある医師が、看護師たちから「サムライ先生」と呼ばれた、とある (FM, 3月19日)。

載せ、原子炉周辺の修理を担当した日本人たちは「英雄のようだった」と讃えました¹⁶⁾。また別の雑誌は（ある技術者の談話を用いつつ）、次のような文化主義的な見方をしています。

(7)恐らく彼等はカミカゼの血の受け継ぐ者たちだった [中略]。そして地獄の只中に向かっていった (PM, 3月31日)。

これらの記事ではカミカゼという言葉が、常に良きものとして使われていることにご留意下さい。震災や原発事故以外の文脈でなら通常カミカゼという言葉は軽蔑的な意味を担っています。日本文化の中には、狂信的かつ非合理的な自殺願望が潜んでいるのだと主張する際に、カミカゼは普通使用される言葉なのです。

原発事故の記事のカミカゼにも確かに自殺行為の主題は漂っています。が、それは英雄的という意味の自殺行為であって、記事全体はカミカゼたちの文化的な他者性を示そうとするのではなく、彼等の行動を称賛しているのです。あとでこの話題にまた戻りまして、その構造を詳しく見てみます。

さて、ここからはまた別のテーマに触れましょう。日本人の立派さという主題と隣接した主題、即ち、社会秩序の維持です。

C. 結束から同胞愛

日本の秩序というステレオタイプは、フランスの標準的出版メディアが日本という社会文化を記述する際、最も頻繁に使う紋切り型の一つです。そのため、日本人の道徳的な振舞いは時に、各個人が熟慮の上、自発的にとった倫理的選択などではなく、躰や規律で形成された条件反射に過ぎない、とすらされることがあります。

これが所謂、日本人の集団主義あるいは順応主義です。1993年のある

16) Pt, 3月24日。

大手週刊誌に次のような例があります。

- (8)日本社会の順応主義とは、日本人が生き延びるための頼みの綱なのである。通常我々は、何か道徳的な原則や、合理的な行動原理を信じることで、それを自分の人生のガード・手すりとしているが、日本人にはそんなものはないのだ (Exp, 1993年11月15日)。

こうした先入観は、阪神淡路大震災の際のフランス・メディアの言葉に強く影響を与えていました。1995年のフランスでは、日本人の連帯性を語ることは、日本人の集団主義という紋切り型を確認することに外ならず、つまり、感情的には空っぽで全く形式主義的な日本人の行動様式を確認していたのです。

阪神淡路大震災の際、フランス・メディアは、日本人の集団の努力のうちに、日本人ひとりひとりの自発性や、個人個人の努力を見ようとはしませんでした。当時の記事の論調では、日本人が個人で救援活動に出ても、それは何らかの指導によるものであるとか、あるいは、規律ある行動という概念があまりに身に染み付いているからだ、とされていました。例えば以下の引用にあるような、軍国主義的意味合いが含ませてある言葉です。

- (9)地震の報道があると、即座に大阪府民は、リュックサックに食料やミネラルウォーターのボトルを詰め込み、神戸の救援に向かった。ひと言も発せず。そして隊列を組んで (NO, 1995年1月26日。強調は筆者)。

では、2011年東日本大震災を語るフランス・メディアの場合はどうだったでしょうか。日本の集団的規律というテーマは勿論そこにありました。例えば、「この規律正しい国民は、伝統的に官憲を信頼している」と

いう表現が見られます¹⁷⁾。

またある記者が、ジャン＝フランソワ・サブレに次のような問いをしています。この問いの中にも、同じような日本的規律の考えが横たわっています

- (10)日本人の冷静さのある部分というのは、集団的規律によるものではないのですか？ 地震が起きてヒステリーを起こすというのは、日本人にとっては、「社会的な無作法」にあたるのではないですか？
(FM, 3月19日)

ここにはまた、日本の行動様式は共同体の抑圧によって形成されているという文化主義的解釈の紋切り型があります。日本人の行動とは、言葉の全き意味での主体が倫理的に選び取っていくものではない、という考え方です。

ですが資料を仔細に見てみると、こうしたステレオタイプ化された表現とバランスをとる要素が、そこかしこで見付かることがあります。

先ず、ここ数十年ほどのフランス・メディアで、日本的なるものを表わす語彙の典型である、集団的とか、規律とか、克己心とか、団結の精神、といったタームは未だに使われていますが、集団主義という語は、私の今回のコーパスである雑誌メディアからは消滅しました。

語彙は、徐々に変化しつつあるのです。2011年のメディアに良く見られたのは、聖なる団結や、同胞愛や、連帯や市民的社会参加といった言葉でした¹⁸⁾。

つまりこうした言葉は、日本社会の精神的な他者性を提示するものではありません。日本は、西欧と同じ価値観、同じ行動様式を有しているのだと言っているのです。そしてそれが、フランス人の共感を呼び覚ま

17) Pt, 3月24日。

18) 順に、VSD, 3月24日、FM, 3月19日、TR, 3月26日。

すのです。

言い換えると、東北を襲った地震・津波・原発事故の三つの惨事を報じたフランス雑誌メディアは、日仏両国の文化的精神的なギャップを強調するというかつての論調を棄て、日仏両国の仲間意識を強調しているのです。そしてこれは、1989年のカリフォルニアの大地震に際しての、フランスの共感と同様の口調なのでした。

では次に、しばしば日本人の行動にとって抜き差しならぬものとされる、日本固有の文化というテーマはどのような扱いを受けているか見てみましょう。日本文化というテーマのステレオタイプは2011年のメディアではどのようなものとなっていたのでしょうか。

D. 東洋的運命論と日本の魂：問題ある紋切り型？

東北地方の災害に関するフランスの雑誌記事はしばしば、何か理論でも樹ち立てたる勢いで、儒教、仏教、神道の日本文化に占める位置について言及しています。

こうしたことへの言及は、雑誌記事がフランスの読者に、日本人の行動の文化的説明をしようとしたものです。特に、何故かくも日本人が「立派」な振舞いを見せるのかという問いに対して使われるのが、儒教、仏教、神道なのです。日本人の「立派さ」は時に、日本人の「諦念」あるいは「運命論」として解釈されます。

- (11)不幸に直面した日本人の、これほどの立派さ——あるいは、これほどの諦念——には、彼等の宗教や文化以外に理由はないのだろうか？
(FM, 3月19日)

御存知のように、諦念（運命論）という言葉は、東洋に関する異文化表象において長い歴史を持っています。また諦念とは、西欧ではかなりの長期間にわたって、服従する者の文化、即ち敗者の文化を貶める言葉でした。運命論者達が屈服するのは、超越的な意志、あるいは世間の物

事の順序というものでした。一方で、そうしたものの正反対の文化として、意志の文化があります。プロメテウスの反抗の文化、創造の文化、つまりこれが、西欧の文化です。

言語学者モーリス・トゥルニエの表現を借りますと、こうした運命論という言葉のニュアンスは、極めて社会的に構成された語源なのですが、ともあれ、日本関連の記事には決まって現れるものです。東洋的運命論という言葉の持つ侮蔑的な意味合いが、日本の運命論という表現に現れているのです。

また、全ては滅びるという考え、諸行無常というテーマがあります。これは仏教的でありかつ神道的な主題でもあります。ともあれ、フランス・メディアに頻出します。多くの記事が、日本では定期的に天災が発生して何もかも破壊すると述べます。また、日本の神社は定期的に建て直しのされる神域であるということも、しばしば触れられます。

この無常観に言及することでメディアは、日本人というのは、一切が滅び行くという意識を特別に強く持つ民族だと強調したいのです。そしてそこから、悲惨事にも社会秩序が保たれ、精神的に挫けない、という事態を理論化するのです。

(12)明日何もかも失うかも知れない。人間の運命はそれを受け容れることだ。こうしてこの国は、何度もやり直すこと、建て直すこと、作り直すことに慣れてきた。我々の持っているのが石の文化だとすれば、日本にあるのは木の文化である。日本神道にとって最重要の神社である出雲大社は、木造建築であり、さらに20年ごとに建て替えられるのである (Pt, 3月17日¹⁹⁾)

こうした分析はそれなりに尤もらしいですし、そもそも日本学者たちは

19) ジャン＝フランソワ・サブレへのインタビューからの記事。日本の無常観を強く念頭においた発話者は、どうもこの聖域の再建のペースを誇張しているようだ。

この種の分析を頻繁に提出してきました。ですが問題がない訳ではありません。というのも出版メディアというのは紙数が限られていますから、記事は単純化され、詰め込み気味になり、図式的になり、正にステレオタイプの特徴を備えてしまうのです。

かくして、日本文化の分析は、いつしか比喩に頼る余り、日本の魂の記述に横滑りしてしまうのです。この到達し難い日本の魂こそが、日本人の他者性という表現の紋切り型そのものなのです。「日本的魂を形成した仏教と厳しい自然」というタイトルの記事を『ル・ポワン』に見ることが出来ます²⁰⁾。

少数ではありますが、こうした点についての論争的記事が、いくつか雑誌に出されました。これは、複数の雑誌に出されたものですから、議論は断片化してしまっていますが、例えば

- 『ル・フィガロ・マガジン』（3月19日）でジャン＝フランソワ・サブレは、運命論の単純な概念には反対しています。
- また『ル・ポワン』では作家フィリップ・フォレストが、その前の週に同誌に掲載された特集記事に異を唱え、日本的魂という概念を批判しました。

先ず、日本的魂という表現は、キリスト教的な色彩を帯びていて、そこには神秘的な性質が籠められている、つまり、他者性が喚起されている、というのがフォレストの批判の理由です。次に、この日本の「魂」の構成要素として、ストア派的克己主義、運命論があり、それらがまた例外的なまでに高いものだとされている。だからそうした魂を持った日本国民は、不幸の際にもほかのどの国民よりも苦しまないよう文化的に

20) ジャン＝フランソワ・サブレへのインタビュー記事の副題（Pt, 3月17日）。「魂」という言葉は、サブレ本人によって発せられている。フランスの読者向けに使われた言葉かと思われる。

形成されている。とそういう暗示を「日本的魂」が為す点に、フォレストは反対したのです²¹⁾。

こうした賢明な意見は、日本人の他者性の表象に疑義を差し挟んでいます。これまでの日本像が大幅に修正されようとしている、とは言えないかも知れませんが、それでもなお、こうした雑誌記事の存在によって、観察する国フランスの文化と観察される国日本の文化の間に、連続性や仲間意識があるという議論が形成されようとしているのです。

ですから次には、こう問うてみる事が出来るでしょう。阪神淡路大震災の時には、日本への仲間意識などというものはフランスにとって不自然で異端的なものだった筈なのに、一体文脈の何が変わって、2011年の時点でこうした仲間意識が容易に口にされるようになったのでしょうか？

II. 文脈の変化と表象の修正

A. 証言の多様化

最初に強調しておきたい要素は、メディアそのものに関わる技術的なことです。つまり、現場からの声として伝えられるニュース・ソースが、多様化し、そのことからバランスが良くなったのです。

阪神淡路大震災について調査した時に気付いたのですが、引用される言葉の元ネタというのは大きく二つありました。日本メディアか、偶然居合わせた外国人です。震災現場の日本人が語るというのはそれらに比べると極く少数でした。

21) 「“日本的魂” などというものを言い立てて、被災者たちの立派な振舞いを説明することには [中略] 違和感を覚える。というのも” 日本的魂” という言葉が、日本の歴史と文化の築いた特殊性を踏まえて用いられているとしても、[中略] 最悪の惨事に見舞われた者、人生のすべてが一瞬にして奪われた者の苦しみが(その日本的魂なるものによって)和らげられたりするものだろうか。文化的差異というものは当然存在しはする。しかし人間性の普遍性という大前提に変わりはないのだ」(Pt, 3月24日)。

2011年の場合は全く違ってしています。日本人の語る言葉の方が、多数を占めているのです。しかもその日本人話者が誰なのかもはっきり明示されています。匿名でなく名前のある彼等が、話をするのです。

こうして大震災の情景の中に、共感を呼ぶ人々が多く姿を現します。リョウイチという献身的な医師がいます。彼は「災害が世に出した心の貴族」の一人である、とある雑誌は記しています。またノリコという教師がいます。彼女は被災者たちに「全てを分かち合う」精神を教えます。また、全財産を捨て避難することを余儀なくされたカツヤの名が見えます²²⁾。

このように、阪神淡路大震災の際には群衆的で無人格だった日本人像は、より個人の顔の見えるものとなったのです。そしてサン・フランシスコの地震の報道のように、2011年のフランスの記事は、多くの教訓的な行動や英雄的な事例を伝えたのでした。

この現象の理由として考えられるのは、フランスからのジャーナリストや特派員が被災地に迅速に到着したことです。しかも彼等のうち、かなり日本語力のある者や、既に日本社会に溶け込んでいる者もいたのでした。

B. 経済関係の変化

二つ目の要因はとても重要です。即ち、フランスが抱いている、経済大国日本というイメージが変化した、ということです。

1995年、フランスは未だ修正主義的な言説の影響下にありました。そしてメディアは一般的に日本を、野心と敵意に満ちた国、フランスとは決定的に異質な経済大国だと看做していました。

それはもう過去の話です。黄禍という古臭いステレオタイプの再利用は、もはや全く日本には適応されなくなったのです。報道も世論も、危機は日本にも訪れるのだと理解し、また程度の差はあれ日本も西欧の列

22) *FM*, 3月19日、*Exp*, 4月13日。

強と同じ試練に晒されているのだと、理解したのです。つまりフランスと同じだということです。

ですからいまや、日本の敵意とか、脅威とか、異質性ではなく、日本とフランスの共通点がより報道されるようになったのです。失業率や、国の借金や、政治の沈滞といった話題です。そして数年前から、経済的黄禍論は別の国に適用されるようになったのです。即ち中国です²³⁾。

C. 施設とテクノストラクチャーの類似性

最後に三つ目の理由を指摘しましょう。2011年フランスに、日本社会とこのこうした仲間意識が成立し、日本に対する共感的な言説が生まれたのは、日仏のエネルギー産業の方向性や、エネルギー業界の管理体制や、そしてそれらの国民への余波を、フランス・メディアが大きく取り上げたことにも由来しているのです。

福島の悲劇は、強く次のことを確信させました。即ち、それは我々にも起こったかも知れない、我々にもきっと起こるだろう、ということです。西欧社会は、エネルギーに関して、その施設に関して、その管理について、日本と全く同じ選択をしてきました。つまり西欧社会は、日本と同じ無分別を示して来たのです。

この確信はフランスでは特に強いものでした。2011年フランスの雑誌メディアはこぞって、フランスの80%の電力が原子力に拠るものであり、原発を沿岸部や地震発生地域に建設したことを、国民に思い起こさせた

23) 興味深いことに、東日本大震災の前日の3月10日、『ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』の冒頭コラムは、当時『ル・モンド』編集長エリック・イズラエルヴィッチが出版した書籍『中国の倨傲』についての話だった。20年以前に大きく取り上げられた「日本の倨傲」という認識と重なるものである。「アメリカでは、特に選挙の季節がやって来ると、“ジャパン・バッシング”がまるで国技のごとく盛んになる。フランスでは、潔癖な人々が、かつて“アメリカ帝国主義”を断罪したように、所謂“日本の倨傲”を断罪するのである」(マルク・エプスタン『カイエ・ド・レクスプレス』19号、1993年1月、104頁)。

のです。

すると、原子力発電の推進派と反対派の間で、激しい論争が起きました。推進派が、あんな事故はフランスの原発では起こり得ないと主張すると、反対派は次のような説得力のあるイメージを持ち出しました。日本の技術の先進性と優秀性、日本人の規律の良さ、作業遂行の際の正確性、です。そしてこう結論づけました。もしもあのような事故が日本の福島で発生したのなら、それはフランスの原発のどこで起きてもおかしくはない、と。

- (13) 「日本人はきっちりしてて、ピシッとしてるでしょ。[と、トリカスタン原子力地区に住むあるフランス人農家は言う] 日本人に状況がコントロール出来なくなったっていうけど、俺たちフランス人、日本人より巧く出来ないよね」(Exp, 3月23日)。

日仏の電力施設は似たようなものだという考えはまた、東京電力についての記述がフランスの雑誌に出るに及んでいよいよ強まりました。特に注意を惹いたのが、東電の不透明な情報開示でした。

東電の情報開示のやり方は、早い段階で、フランスにおける原発管理会社 EDF (ウーデーエフ) のそれと比較されました。そして、東電の沈黙や改竄は、EDF の断片的で欺瞞的な情報開示と同種のものであると思われたのでした²⁴⁾。

こうした点での日仏原発業界の類似性がある以上(そして原発がどこも似たようなものだという考えは、スリーマイル諸島とチェルノブイリの原発事故との比較によっても強められるのですが)、原発事故の原因

24) 多くの記事が、ブレイエ、サン・ローラン・デ・ゾー、トリカスタンの原子力施設で発生した障害に関して、日仏の比較を行っている。「フクシマ原発の管理会社である東電はその隠蔽体質について批判を浴びているが、これは、隠し事にかけては長い歴史を誇る EDF もアレバも全く同じ事である」(Tr, 3月26日)。

を、各国固有の文化に求めることはもはや出来ません。そうではなく、技術的、経済的、社会的な様々な要因の絡むこの世界に、機能上の類似性があれば、その意味について考えることが求められているのです。

つまり、事態からどんな教訓を得るべきかという主題がメディアに現れます。そしてその教訓とは、単に日本やフランスだけの問題ではなく、人類すべての問題なのだと、雑誌の論説記事は述べています。

(14)人々を救済する技術などというものを盲目的に信じることは、最早不可能である。[中略] 原子力の神話は崩れ去り、全人類を不確かな時代へと道連れにしているのである (*Tr*, 3月26日)。

この点については、複数の雑誌が好んで使用した語彙に注目すべきです。日本（人）と並んで、人類、また我々という総称的な代名詞が使用されているのです。

(15)この大災害は、既に病み疲れていた日本の民主主義と経済にとって、非情な試練となった。しかしこの余りに人間的な悲劇は、我々に直に三つの問いかけをしているのである。我々は情報を持っているか？ 我々に備えは出来ているか？ 我々は守られているか？ という問いである (*Exp*, 3月23日)。

さらなる例が『ル・ポワン』に載った「フランスのプロメテウス」というタイトルの社説です。その記事はギリシア神話を日本に当て嵌め、日本を契機として、人類と技術との危険な関係についての考察を行ったのでした。

結論

2011年3月11日の大地震、津波、そして原発事故は、フランス人が広く日本社会について持っていたイメージを一変するような出来事だった

でしょうか。この問いには未来が答えることでしょう。

当面言えることは、次のようなことです。東日本大震災は、当然ながら、以前からフランスにあった日本への先入観なしには語られませんでした。そして日本を描くために、先入観は数多く動員されました。運命のような自然の力、堅固な日本人の性質、個人の集団への献身、歴史ある哲学的宗教的伝統による各人の行動への影響、といったものです。

こうした言論形成の顕著な要素として、語彙レベル、表現レベルでの紋切り型の存在が確認されました。

が、強調されるべきなのは、フランス・メディアが日本を描写する手付きです。つまり、ほぼ常に、好意的な言葉で、日本が語られていたということです。

ステレオタイプは確かに再生産されていますが、今回の文脈では、大多数は日本最良のステレオタイプだったのです。それで、ある種の論者は否定的な意味合いのステレオタイプについては批判を展開したのです。例えば、日本の運命論には疑義が差し挟まれ、また日本の集団主義という言葉は消えてしまいました。日本人がまとまって行動することを『マリアヌ』(3月19日)はより好意的に団結の精神などと形容したのでした。

ですが、私が恐らく最も注目すべきだと考えるのは、総称的代名詞我々の使用です。ここにフランスから日本への共感が現れており、行動の面でも価値観の面でも日仏の間の、私が言うところの仲間意識というものが我々という言葉に現れていると思うのです。

日本最良のステレオタイプも勿論、日本の他者性を示すものであることに変わりはありません。そして正にそのことが、日本的文化の伝統を褒め讃えるという行為の孕む両義性なのです。しかし、フランス・メディアの東日本大震災報道の場合は、日本の他者性はさほど突出していません、いえむしろ影を潜めています。災害の凄まじさやそれに対応する日本人の立派さの記述が、日本人の他者性を抑え込んでいるのです。それに加えて、エネルギー産業の類似性や、人類的規模での挑戦という言

葉も、さらにそこにはありました。

この点について、社会心理学のパイオニア、ムザファー・シェリフの分析を想起することが出来ます²⁵⁾。ムザファー・シェリフは、競合するグループ間にはステレオタイプ・偏見が発生するが、それは、競合するグループが何らかの「上から与えられた」目的を持つと消滅してしまう、と言います。つまり簡単に言えば、重要課題に共同で当らねばならぬとき、偏見などは消えてしまうということです。週刊誌『ル・ポワン』（3月24日）がそのことを、名高い表現を用いつつ、次のように述べています。

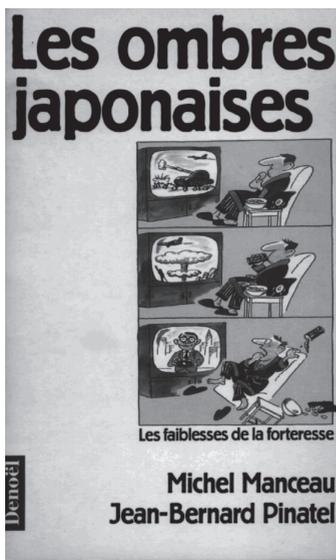
(16)我々はみな日本人なのだ²⁶⁾。それは、称賛すべき勇気ある国民に、我々が当然抱く連帯意識の故ばかりではない。日本人を次々と襲った災害は、世界規模で妥当する教訓を我々に求めているからである。

(パリ東マルヌ・ラ・ヴァレ大学准教授)

25) 『グループ間の緊張関係から国際紛争まで』パリ、ESF, 1971年（フランス語訳本）。

26) 〔訳者注〕1968年の5月革命で指導的役割を演じていたダニエル・コーン＝ベンディットが、ドイツ人でありユダヤ人であるというその出自を反革命側から攻撃された際、学生たちはむしろこれを団結のスローガンとして、「我々はみなユダヤ人でありドイツ人なのだ」と叫んだ。『ル・ポワン』はこの表現を踏まえている。

補足資料



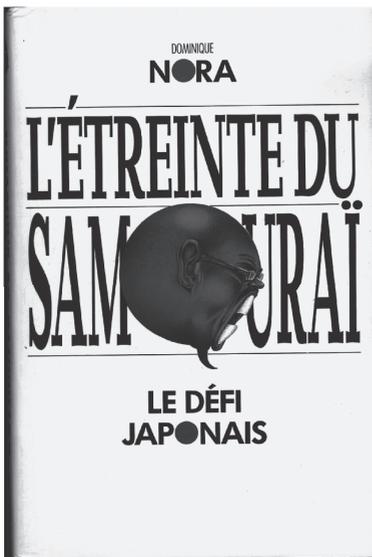
『日本の影』表紙（ドゥノエル社、1992年）。戦争よりも恐いものとして、笑みを浮かべ、カメラを持つ日本人旅行者が描かれる。戯画家が嘲弄しているのは、1990年代初頭のフランス社会に浸透していた、日本への憎悪と恐怖の感情である。



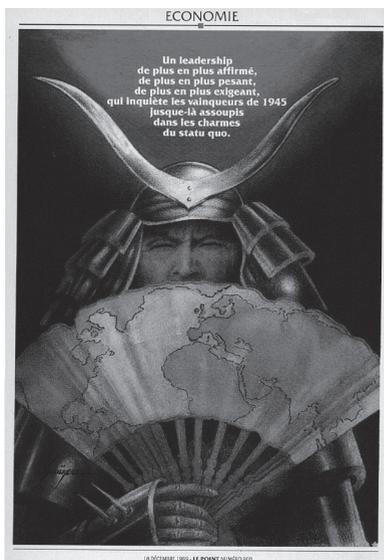
『ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』掲載の前掲書の広告（1992年）。従順で順応性が高く、仕事バリバリの日本人サラリーマンの近代性の外見の背後に、永遠の日本の異質性が浮かび上がる。



『ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』表紙（1988年10月7日刊）。様々なシンボルが盛り込まれて（蟻、そして明らかに日の丸）、敵対的に描かれた日本は、フランス国旗を食べている。



ドミニク・ノラ『サムライの抱擁』の表紙（カルマン＝レヴィ社、1991年刊）。ここに挙げたのは同年刊、フランス＝ロワジュール社版。暴力や攻撃性をその特性とするとされた日本のメタファー。



『ル・ポワン』（1989年12月18日刊）
特集ページ「恐るべき国日本」に
掲載されたカリカチュア。歴史
（サムライ）と神話（悪魔）の参照
による、強大な力のイメージ。